

## 語研という場

磯地明雄

語研の例会も1962年11月の第一回から数えてほぼ四十年弱で200回を超えると言う。これを期に語研運営委員の手によりその一覽が纏められた。ついては「語研」について一言なにか草するようにとの運営委員からのご依頼だが、さて、荷はなかなか重い。今日の騒然たる社会情勢、それと連動するかたちでここ数年続いてきた、そして今もその渦中にある大学改革、更に、そのような状況下において「語研」自体の抱える諸々の問題、等々が一挙に頭を駆け巡る。これらの大きな問題に対処するようなことは、もとよりわたしの手に余る。思い付くままにあれこれと書くことにする。

この一覽表にざっと目を通していくと様々なことが思い浮かぶ。もちろん個人的な思い出や感慨も多いが、より大きなこととして、この一覽、および、機関誌『言語文化』収載の論文、研究ノート、書評、等々に窺われる多士済済たる顔ぶれとトピックスの多様性が目を引く。語学と文学、それに広義の哲学、を中心とする人材を集め、四十年と言う歳月を経るならば、ここに見るような多彩なトピックスが表われるのも当然とも言えようが、この多様性の中に一つの共通性、ないし、その中核を成すもの、を見出すことも可能ではないかと考える。

現今の世の中には暗いニュース、殺伐とした事件が蔓延している。テロリズム、経済の後退、教育界全般に関わる見直し・改革、等々。このような世相を背景にしながら、詩を論じ、文学を語り、片々たる言葉の意味を問うことは、所詮、閑文字の徒たるを免れぬのではないか。このような営みに明け暮れる当事者の胸の内にも一抹の蟠りがあり、社会一般にもまた何がしかの異議申立てがある、と言うのが実状だろう。プラクティスとセオリー、あるいは、プラクシスとテオリーアの相克という図式は古来尽きることなく続く。些か乱暴ながら、専門教育と教養教育、実学と虚学、こうした問題も詰まるところは今いった図式の延長線上にあると言える。而して、われらはまさにこの一見無益にして浮世離れた世界に生きる者たちである。にもかかわらず、あるいは、そうであればこそ、われら言

語と文化に携わる徒のレズン・デートルを探り、主張したいと言う思いが動く。

周知のように、英語の school, ドイツ語の Schule, フランス語の école, みな、ギリシャ語の skhole に由来し、ラテン語 schola を通じてヨーロッパ諸語に借入された。このギリシャ語の原義が「余暇・閑暇」であること、更に転じて、とりわけ「討論・学問に当てられる〈余暇・自由な時間〉」、そして、「討論・学問の場、つまり、学校」の義になること、これまた周知のとおり。この語をめぐって少し考えてみたい。

教室で、「school」の語源はギリシャ語の 'skhole', スコレー, アクセントは最後のレー, 意味は英語の 'leisure' に当たる」というと、学生たちの顔には「へー?」という思いと、にやにやとした嬉しそうな面持ちが浮かぶ。素朴な驚きは微笑ましいが、「ニヤニヤ・ニコニコ」の背後には「レジャーか、大学のレジャー・ランド化とか言うけど元々そうだったんか!？」という誤解、曲解にもとづく自己弁護の趣がちらつく。しかし、その誤解ないし曲解のもとには、英語の 'leisure' を、即、日本語の「レジャー」と置き換えて怪しまないところにある。両者の意味するところには微妙な、そして、重要な違いがある。

試みに手もとの辞書に当たると、'leisure = free time, time at one's own disposal' とある (POD)。つまり「自由な時間」であり、「自分自ら自由に使える時間」である。この「自由」という語のもつ重みと「自分自ら」という語に含まれる主体性が問われることになる。一方、日本語の「レジャー」には、「余暇」はまだしも、「(余暇を利用してする) 遊び、娯楽」という意味合いがきわめて強い。だが、いわゆるレジャー産業とマスコミの喧伝に躍らされて右往左往するのはそもそも「自由」とも「自分自ら」とも相容れない。'leisure' 本来の義に悖ると言わねばならない。この 'leisure' の意味を深く考えることは、実利・実益・効率の追求に明け暮れる今日、とりわけ重要だろう。

話を 'skhole' に戻す。ここでいう skhole, そして、それに相当するラテン語 otium, つまり 'leisure' は、言うまでもなく、単なる物理的・客観的な存在としての「自由時間、余暇」のみを意味するものではない。それによってもたらされる精神の自由、余裕、更に、その積極的な活用、等々をも意味する。手もとの一辞書には、'skholen agein' 「余暇をする」、'skh. labein' 「余暇を獲得した」、というエウリピデースの用例、あるいは、'skh. poieisthai' 「余暇を作る、する」とい

うクセノフォンの用例がみえる。(みなそれぞれ「暇を得る」ぐらいの意かもしれないが、敢えて直訳すればこうなる。)ただ受け身の姿勢で与えられるのではなくして、積極的に関わる姿勢がみてとれる。また、ある辞書は otium の用例に、その活用としての「著述、学問・研究」‘otium litteratum’ (Cicero)、その成果としての「詩」‘otia nostra’ (Ovid) 等々を挙げる。(Lewis の *Elementary Latin Dictionary* は前者 ‘otium litteratum’ に ‘learned leisure’ という実にうまい訳をつけている。)

ところでこの skhole および otium は、それぞれの派生語として askholia および negotium を持つ。語頭の a-, neg- はともに否定の意味を表す接頭辞。従って、それらの意味は共に文字どおり「暇なし」、転じて、「仕事、用務、取引き」。(因みに negotialis は ‘relating to business’, negotiator は ‘a businessman’。英語の negotiate, negotiation はこれからの派生。)おもしろいのは、古典ギリシャ語には日々の「仕事、用事」を表す一次語がなく、上に見るような skhole の否定辞しかないという。(ラテン語では「業務・用務」の意として res があるが、この否定辞 negotium の使用が主流らしい。)要するに、「余暇・閑暇」こそが主であり「仕事・用務」は従の位置づけである。

序でに付言するならば、日本語の「いとま」(暇)と「いとなみ」(営)の「イト」は同根で、「休みのとき」の意であるという(岩波『古語辞典』、白川静『字訓』)。つまりは、「いとなむ」(営)とは「いとなし」(暇無し)の動詞化。造語法においてギリシャ・ラテンと軌を一にするのは興味深い。更に付言すれば、「余暇」といい「閑暇」というときの漢語の「暇」に対する『廣漢和辭典』(大修館)の定義は、「いとま、ひま、ゆっくりとして忙しくないこと。またその時。ゆっくりする、のびのびとしている。」これはかなり skhole, otium, leisure の義に通じる。

このように見てくると、‘skhole’, ‘otium’ は、ひとつの積極的な精神的態度を指す言葉といえる。「余暇」という言葉には、「仕事・労働」を主とし「余暇」を従、言換えれば「余りもの」として、それを捉える響きがある。それゆえこの語は避けたいところだが今は便宜上これを使う。

更にこの「余暇」の本質、その有るべき姿を問うことを迫られるが、今は紙幅が許さない。(ヨゼフ・ピーパー『余暇と祝祭』(講談社学術文庫)参照。数々の示唆に富む指摘と考察——特に ‘contemplatio’ との関係について——が成され

ている。) ここではただ所謂「リベラル・アーツ」との関わり、とりわけ「リベラル」の意味についてのみ一言する。

これら skhole, otium の享受は、古典ギリシャ・ローマの世界では、いうまでもなく「自由な」(eleutheros, liber) 人々の特権であり、このような「自由人にふさわしい」('eleutherios', 'liberalis') あるいは「自由人として身につけるべき」学問・技芸が 'eleutheria mathemata' であり 'artes liberales' に他ならない。専ら実利・実益に結びつく 'artes serviles' (奴隸的な技芸), 'ars mechanica' (手仕事) と対比されるものである。序でにこれとの関連で付言すれば、英語の 'mechanical' は 15 世紀以来、上に見る 'liberal' との対比で、「卑賤な」(職種, 等) の意味で長らく使われてきた。17 世紀以来は更に、頭を使わぬ, ルーティン・ワークの, というような意味合いが附加され, 産業革命期ごろから今日われわれが考えるような「機械による」の義が登場する。ちょうど, 'industry' が「勤勉」の語義を長らく保持しながら, 同じく産業革命期に「産業」の語義を強く表面に打ち出し——例のカーライルの 'The Leaders of Industry...are virtually the Captain of the World' という言葉は 1843 年刊行の *Past and Present* にみえる——それに伴いその形容詞 'industrial' と 'industrious' が一般に使い分けられるようになるのと軌を一にする。

この liberalis, servilis とともに社会的身分を指す語義から, それに属する人の心的・倫理的属性を表す語義へと転化して行く。ここでもまた liberal, liberalis の意味・本質を検討しなければならないが, artes との繋がりにおける限りで言うならば, ここに言う「自由な」(liberalis) とは「真の意味での〈余暇〉に基づく, 実利・実益・効用を離れて, 知ると言う行為それ自体が喜びとなるような」そして「心の開かれた, 狭い範囲に囚われない」の謂であろう。かくて 'artes liberales' は, 時代の推移と共に, 「人間本質としての精神の〈自由〉へ向けての教育・研究」という意味合いを含みつつ, 中世ヨーロッパの主要なカリキュラムとして引き継がれ, その概念と実践とは 18 世紀, 19 世紀まで連綿として生きつづける。

いささか「閑・暇」を強調しすぎたかもしれないが, もとより「自由学芸」(liberal arts) にはその主要な要素として, 開かれた精神と同時に, 大局的な視野に立つ判断と純粋に理性的な思索を基盤とする 'discipline' が含まれる。閑暇

(skhole, otium) と自由な (eleutherios, liberalis) 精神とが相俟ってはじめて可能な世界である。

今日、少なくとも英語では liberal という形容詞を上述の意味で使うのは、'liberal education' そして artes liberales の継承たる 'liberal arts' ぐらいしかない。だがこのことは、その意義と存在理由が消失したことを意味するわけではない。学問分野があまりにも専門化し、また、社会一般において実利・実益・効用の追求にひた走る今日こそ省みるべきものであろう。

さて、ここで「語研」の存在とそのメンバーの営為に話を戻さねばならない。言うまでもなくその中心は人文系の研究・教育にある。(固より人文・社会・自然の系列あるいは領域の境界自体が今日では曖昧となり融合したり交錯しているが。)そして、本学においては、それは数学、自然科学、体育等と並んで、いわゆる「教養教育」の一環を成す。ここで話がややこしくなる。そのややこしきの現われ、困惑、混乱、が「語研」の歴史でもあり、現在も尾を引いている。「教養」をめぐるのは古来幾多の考え方と実践があった。パイディア、人文学 (studia humanitatis)、等々、これらを検討し始めればきりが無い。この拙文で敢えてリベラル・アーツのみに視点を絞ったのは、今一度その「リベラル」なるものの意味を考え、語研メンバーの営為に繋がったからに他ならない。

語学研究室の創設自体も、おそらく、学内の一大悶着と先輩諸兄の多大な努力との果てに成ったものと推察する。機関誌『言語文化』第1号(1964年11月3日発行)の編集後記には、「本学における〈語学研究室〉創設の目的は、社会科学の総合を目指す学園にあって諸学の研究と密接な関連を保ちつつ言語文化一般および現代的視点に立った広義のフィロロギーの確立と、併せて語学教育のいっそうの改善とに寄与することにある」という言葉が見える。更に続いて、30年以上にわたって所謂「新学部問題」をめぐる数々の経緯があり、その間この語研創設の目的と理念は変わることなく続いてきた。

この目的と理念の実現がいかに困難であるかは最初から自覚されることながら、その根本は、利益追求型の現代社会の趨勢とそれを背景とする教育姿勢、それと「リベラル・アーツ」ないし「教養教育」とは本来的に相反する、少なくとも、結び難いというところにある。上に見たような〈skhole-eleutheros-eleutherios〉、〈otium-liber-liberalis〉の図式は今やその意味を失い、姿を消し、逆に〈ask-

holia-negotium-business-busyness〉の図式が世を席卷する時代と相成った。世は挙げて business と industry に狂奔し、皮肉なことに「レジャー産業」までが幅を利かせる。かつての agriculture は agricultural industry となり、ついには agribusiness の登場となった。この伝でゆけば「ビジネス・スクール」も生まれるべくして生まれたというべきか。だがこれに就いては今は措く。

ただ、明けても暮れても「ビジネス」の御時世ゆえ、この語に少しだけ触れる。英語の 'business' という語はすでに古英語に登場し、以来、16—17世紀頃までその意味は実に多義的だがその多くは今日では廃義となった。そして、今日、営利事業・組織としての 'business' は現代のキータームとなっている。その間の語義の変遷がわかりにくい。この語は、言うまでもなく、busy+ness (性質・状態を表す接尾辞)。ところが、*OED* 等に拠れば、この 'busy' の語源は不祥、同族語としてはオランダ語に見えるのみで他の印欧語にはないという。出所不明にして、正体不明の、現代の妖怪という趣である。

最後に一言。上に見てきたような、真の意味での「余暇」の喪失は人間性の崩壊に繋がる。その欠如は社会の健全性を損ねる。「発達・発展」(development) がいつのまにか土地や資源の「開発」になり、その名のもとに自然破壊が進み、developer が暗躍する。「欠乏・必要」(need) がいつしか消費の「欲求・欲望」に限りなく近い妙な日本語、「ニーズ」となる。このような趨勢に対して、少なくとも、疑念や危惧を抱く若者たちを育てなければならない。'Liberal' な視野と見識を持つ人材を育成しなければならない。(リベラリズムには本来的に批判精神が含まれる。) 固より、われわれのみがその任を担うなどと僭称するつもりはさらさらでないが、「教養教育」の大きな一翼を担うわれわれの一つの任務だろう。教養教育あるいは人文科学が、仮に、現実社会と触れ合うこと少ないとしても、あるいは、遊離しているとしても——強いて言うなら、むしろ遊離していることこそが大切であるとわたしは考える。一步距離を置くことに因り見えてくる事柄がある。外国語の学習も、そのブラクティスの重要性は否定しないが、母語とそれが生み出す文化から距離を置くことに因って見えてくる事柄こそが重要ではないか——このような、いわば無用の用を許容しえぬ社会は健全な社会とは言えない。更にまた、多様性が持つ重要性は、単に今しばしば話題となる生物多様性だけの問題ではない。自然界のみならず人間事象のあらゆる領域でもその事は充分に留

意されねばならない。その意味でも、大学全体として、さらに社会一般として、このような制度とそれを担う組織を維持し続ける必要がある。

本学では以前から語研メンバーは各学部分属であったが、数年前の学部改組により、新たなインテグレーションが実施され、さらに言語社会研究科が加わった。しかしこの所謂「インテグレーション」により、各メンバーはそれぞれの部署で「インテグラル」な存在たりえているだろうか。さきの編集後記に言う、社会科学の「総合」の一環として「欠くことのできぬ」存在たりえているだろうか。フィロログとしての自己のインテグリティを保持しえているだろうか。概ね既存学部のカリキュラムに何とかして接点を見出そうとして努力しているが、おのれの学的営為を枉げて頑張っているというのが実状だろう。人は帰属すべき社会集団を必要とする。自らの学的営為を枉げることなく所属集団を求めるとすれば、仮にそれが任意集団であるとしても、本学では語研という共同体を措いては無い。その意味でもわれわれはこの組織を維持してゆかねばならない。